

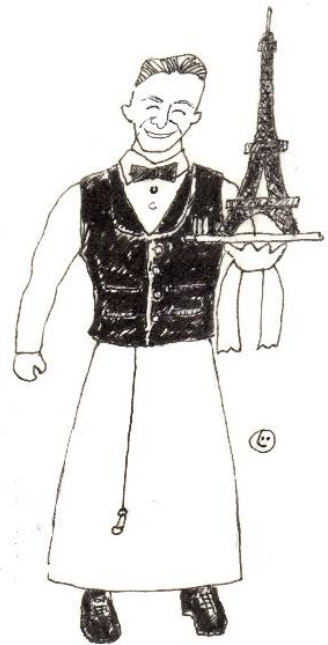
# 巴里は憧れ、ちよっぴり遊覧



画家 小野寺 純一

中学生になった頃から、なんとなく、フランスのパリに憧れておりました。図書室から借りてきた萩原朔太郎の詩に、「ふらんすに行きたしと思えども、ふらんすはあまりに遠し、せめて新しき背広をきて、気ままなる旅に出てみん」というフレーズに、見たこともない異国のロマンを感じたのでした。その頃は専らラジオばかり聞いていて、夕方になると大デュマ作の剣豪活劇「三銃士」や「巖窟王」のモンテクリスト伯爵の復讐ドラマに胸をおどらせ、空想少年の夢は果てもなく広がるのでした。そんなある日、父のスクラップ帖にフランスの画家、アンリ・ルソーの「独立百年祭」という作品が貼ってあり、思わず心が吸いこまれるような気がして、忘れられない作品となり、いつかフランスへ行くのだという思いはつのるばかり、そして半世紀、やっと、その思いがかなう日が来ました。外国語が全くダメな私は、旅行会社のツアーに参加すると決心し、桜のつぼみがふくらむ4月なかば、東京・羽田より、凍りつくロシアの平原をながめながら約12時間、パリのドゴール空港へ着陸したのでした。ツアーに参加した方々は私も含めてご高齢で、添乗員さんは特にトイレに気配りをしています。日本みたいに、あちこちにはいんですね。はじめは「睡蓮」の絵で有名なモネの家を訪ねると、花畑の中にある桜の木に花が咲いていました。次はノルマンディーにある、海の上に8世紀に建てられた、モンサンミッシェルです。島内は階段がめぐり、山形の山寺を思い出しました。ここで玉こんにゃくの店を出せば、売れるだろうなどと、あらぬことを考えたりしております。一応はスケッチ道具を準備してましたが、観光地をめぐり歩くだけで精一杯、デジタルカメラで撮りまくりました。最後の2日間はパリ自由行動ということで、画家たちの聖地モンマルトルへ。ここからはパリ市街が一望でき、エッフェル塔が街並の中にすっと立っております。やって来ました夢に見たあの広場、画家とおぼしき人たちが、スケッチブック片手に、似顔絵のセ

ールス、道端にイーゼルをならべて、自作の絵を販売しています。ちょっとした空き地にはストリートミュージシャンが、なつかしいシャンソンなどを演奏し、カフェにはワインなど食事をたのしむ人々が聞きいています。みんな芸術の中にいることがあたりまえな、心の豊かな人々に感動しました。あのアンリ・ルソーの絵は、米国、Jポール美術館に所蔵されているとききました。つぎはアメリカへと目論んでいるところです。



(絵：小野寺純一さん)